

肩書さしめ

さ

皆様は初対面の人と会ったときに交わす言葉はどのようなことでしょうか。

「お名前は」「ご職業は」でしょうか。私たちは人間として生きる以上、社会と関わり合つてしか生きていけません。その社会は多くの集団で成り立っています。

家庭人の役割、町内の役割、会社の役割、いろいろな顔を私たちは持つてているということです。その中で本当の顔が何だったのかを見失つてはいるように思えます。イソップ物語に次のような寓話があります。「家の中にいた子山羊が、外を通りかかったオオカミに向かつて悪口を言つておまえじやない、おまえのいる場所だ」と言いました。弱いモノが強いモノに挑む知恵の一つの教訓かもしだれませんが、もう一つこのオオカミの言葉には自分が安全なところに身をおいっているからこそ強がる子山羊の卑劣さを笑つてはいるよう思えるのです。この「おまえの場所」を「地位」とか「場所」とか「肩書き」「名刺」「バッジ」「一流大学名」と置き換えてみたらどうでしょう。オオカミの言葉はイソップの時代ならぬ現代でも通用するのではないか。自分の地位を力サに着て威張り散らすのは自分の弱さをさらしてはいるからこそオオカミの悪口を言え子山羊は弱い存在です。弱い自分が強い「家」に守られているからこそオオカミの悪口を言えたのです。しかしこのまにやらその弱い存在を忘れ、地位や肩書きを自分のモノと思い込んでしまうのが人間のようですね。肩書きだけで必要以上に偉くなっている人間はその肩書きを失つたとたんに弱さをさらけ出してしまいます。自分の社会的な地位を誇示する人にはこのようない姿を目にすることがありますね。人間には人としてはたさなければならない「個人の役割」と、組織の中では「役割としての人間」になることを要求されます。

この二つの役割が「ちや」混ぜに考えてませんでしょか。自分ばかりか他人までも「会社はどうな姿を目にすることがありますね。人間には人としてはたさなければならない「個人の役割」からでしょか」「課長、部長、ヒラ」、「大学は」「一流、二流、有名、無名」とその人となりよりも肩書きで判断しがちです。個人の尊重とは言いますが依然として私たちは自分や他人を判断するのに個人として向き合う前に自分の地位や他人の肩書きを念頭に置きながら接します。自由競争、リストラの時代の今、官庁や会社の役割、肩書きに頼りきついては組織が崩壊した途端、守られている家がなくなり苦しみを味わってしまいます。

本当の私は何なのがを平生より見つめていなければなりません。

仏教に肩書きは必要ありません。淨土真宗のみ教えは特にそうだと思います。

名僧、高僧は念佛の教えには存在しません。ただ同じ罪悪を犯しうる「凡夫」がいるだけなのです。そのような迷い悩み、その中でもがき苦しみ続ける人間こそが阿弥陀如来の救いの対象なのです。地位や肩書き名譽は置いていかねばならないのです。『御同朋の社会をめざして』といふ私たちの教団のスローガンは同じ立場に立つ弱い人間同士だからこそ同朋(なかま)なのです。努力を否定はいたしません。しかし努力精進しても人である限り迷い弱さを克服できるものではありません。わかつたような「物知り顔」よりも正直な「わからない私」を告白して生きたいと思いますが・・・